

エピソード 1 ～ 的中する予言～

50代 中学校 男性教諭

中1で受け持ったA君は多動で授業中もおしゃべりがやまず、手のかかる生徒でした。知的な好奇心は強いのですが、授業中も気が散って集中できません。私は過去に似たような生徒を受け持ったことがあり、その生徒も3年生になればすっかり落ち着くことを経験上知っていましたので、A君にもクラスのみならず、わざと自信たっぷりに宣言しました。

「3年生になる頃にはA君はすっかり落ち着いた生徒になってるよ」と。

あいかわらずA君は落ち着きが無く、授業の妨害をすることもありました。2年生もA君を私が受け持つことになり、他の生徒達には時々「A君ももうすぐ落ち着くよ」と話題にして、A君がクラスから疎外されないように気を配りました。

そして、私の受け持ちではなくなったのですが、3年生になったA君は、私の予言通りすっかり落ち着き、それなりの成績で高校へ進み、その高校ではトップクラスの成績を収める生徒になっていきました。

多動と言われる子どもたちも、成人しても多動のままと言うことはありません。大人になれば年相応の落ち着きを身につけ、一人前に社会生活を送っていきます。成長の途中で、先生や親から見ると手のかかる時期は、多かれ少なかれ誰にもあります。ただしその時期に、親や教師から「お前はダメなんだ」というような人格を否定する扱いを受けたり、クラスメイトから「お前はよそへ行け」と疎外された経験が重なると、本来誰でも内面に持っている自然成長の力が弱まり、学校での不適應状態が長引いたり、反社会的な価値観に親和性が増したりします。

担任の先生は、クラスメイトの前で、今はどんなに手のかかる生徒であっても平気な顔をしてその生徒と接する姿を見せることが、その生徒が疎外されたりいじめられたりすることを防ぐことになるのです。一時期を過ぎれば子どもたちは、つきっきりで世話をしなくても、内面に備わっている自然成長の力で天に向かって伸びていきます。

そしてその生徒に向かって、「3年生になる頃には君はすっかり落ち着いた生徒になってるよ」と言い切ることで、この言葉がその生徒の成長を促す暗示効果を生んでいることも見逃がせません。